

Hawaii Wedding Story

一生に一度の大切なハワイ物語

憧れのハワイ挙式を『ファーストウェディング』で実現させたふたりの、実話エピソードをお届けします。

第4回は歴史的建築の邸宅で挙式を行った真島さんの物語です。

Text : Masumi Nakajima Photo : Yasushi Sakai

Vol.4

「つないだ手」

私の左の薬指には黒のマリッジリング。もともと黒が好きというところもあるけれど、人と同じものが嫌いだから、マリッジリングは黒と決めていた。彼とペアでブラックゴールドに黒のメッキを施してもらい、リングの内側には私の大好きな言葉「Love will find a way」と刻んだ。

*

彼と出会ったのは6年前。私が新入社員として入社した会社の先輩だった。人当たりが良く、寛大で誰からも好かれるタイプの彼だから、見知りの私もすんなりと心を開くことができた。そして一番尊敬しているのは、決して他人の悪口を言わないところ。これって簡単にできそう

で、実はなかなかできないことだ。いっぽう私といえは、わがままだし、思いつきで行動するし、友達からは「パンチの効いた性格」なんて言われる。おらかな彼だからこそ、私を受け止めてくれるのだろう。

1年前に私の転勤が決まったことをきっかけに、結婚することになった。「岡山と東京で離ればなれになるのだから、結婚するか別れるかはつきり決めよう」と言われたのだ。ドラマティックなプロポーズの言葉はないけれど、むしろなくてよかった。彼も私も照れ屋だから、私には必要ない。そういう感覚が私と彼はピッタリ合っていると思う。

「歳をとつても手をつないで歩く夫婦になりたい」と、彼はよく言っている。

*

5月3日は両親の結婚記念日なので、もともとハワイへの家族旅行を計画していた。当初は私と彼の結婚式をする予定はなかったが、ふと両親と同じ日に結婚式をあげることを



コヘッドを見渡すことができる。直観的に「絶対にこしかなない！」と、急いでハワイウェディングの専門店ファーストウェディングに電話をした。式を挙げたいのはゴールデンウィーク中だし、それまで3カ月しか時間がないので不安だったが、担当のSさんはすぐに現地へ連絡をとり、1日2組限定のこの会場を無

事に押さえてくれた。そこからはSさんの提案に沿って、ドレスもブーケもパーティー会場もスムーズに決まっていた。ドレスは立襟の個性的なツイードのボウリングの装花はピンクのボール状に仕上げてもらった。パーティーはザ・カハラ・ホテル&リゾートのオープンエアのレストラン「ブルメリア・ビーチハウス」。

*

思いつき、手にとつたウェディング雑誌で、ある美しい邸宅に目を奪われた。ハワイを代表する建築家ウラジミール・オシポフが建てた「リジエストランドハウス」だ。絶景で有名なタンタラスの丘よりさらに上がった高台にあり、やさしい光が差し込む落ち着いた雰囲気。ガーデンからはダイヤモンドヘッドやコ

『リジエストランドハウス』での挙式は想像以上に素敵だった。木立に囲まれたプライベートガーデンで涼しいそよ風に吹かれ、家族に見守られながら愛を誓う。パーティーロードを歩き終えた時、「これからふたりで力を合わせ、助けてくれる人々に感謝しながら生きていきなさい」という父の言葉が心に響き、思わず涙がこぼれそう。必死

にこらえた。式を終えると祝福の雨が降り出し、その後すぐに現れた綺麗な虹を見たとき、私たちが夫婦はずっと幸せでいられると、ハワイの神々から言われたような気がした。パーティーでは二人からゲスト一人ひとりにプレゼントを渡した。家族だけの少人数なので、それぞれの好みがわかるからできたことだ。両親には結婚35周年と私たちの結婚を一緒に記した記念プレートを作った。プレゼントした。これから何十年も、私たちは両親と同じ結婚記念日を重ねていく。私の席上にある彼からのメッセージカードには「歳を重ねても変わらず、手をつないで街へ遊びに行けるような仲の良い夫婦であり続けよう」と書かれている。結婚記念日には毎年、手をつないで写真を撮る約束をした。

*

日本に戻ってから、私はフラを習い始めた。ハワイが大好きになったからだ。自然の心地よさと美しさはもちろん、ハワイでは道ですれ違ふ人々みんなが私たちに「おめでとう」と祝福の言葉をかけてくれた。あたたかいアロハの心くれた。なんて素敵な場所なんだらうと、ハワイそのものに心底感動した。いつか、そのアロハをフラで誰かに伝えられるようになりたい。今はまた岡山と東京で別々に暮らしている私たち。彼にはちよつと悪いけれど、今週末も女友達と4人でハワイに行く予定だ。彼と一緒に暮らせる頃には、少しは上手に踊れるようになっていく。